

# 飛鳥寺西方遺跡



2011年11月  
明日香村教育委員会





調査区全景（上から）右が北

# あすかでらせいほういせき 飛鳥寺西方遺跡

## 1. はじめに

今回の調査は、飛鳥寺西方にひろがる遺跡の性格や規模を明らかにすることを目的とした範囲確認調査です。調査地は「入鹿の首塚」から南へ約 90m、飛鳥寺中金堂跡（安居院本堂）から南西へ約 120mの位置にあたります。

この飛鳥寺西方地域は、『日本書紀』において、「法興寺槻樹下」や「飛鳥寺西槻下」としてたびたび登場します。大化の改新の前には、中大兄皇子と中臣鎌足が蹴鞠を通じて出会った場所として、また、壬申の乱の際には、飛鳥を守るための軍営が置かれています。このほかでは、蝦夷や隼人などの辺境の人々と饗宴した場所としても描かれています。これらの記事から、飛鳥寺西方には人が多く集まることのできる「槻樹の広場」があったと考えられています。

この地域では、これまで部分的ですが、発掘調査が行われてきました。その結果、掘立柱塀や土管暗渠、石組大溝、石組小溝、敷石遺構、砂利敷などが確認されています。また、建物の痕跡が認められず、砂利や礫が敷かれた石敷空間が広がっていたと考えられています。今回実施した調査面積は、約 300 m<sup>2</sup>です。

## 2. 検出遺構

今回の調査では、石組溝 2 条、石列、土管掘形、砂利敷、素掘溝などを検出しました。

石組溝は南北方向に 1 条、東西方向に 1 条検出しました。南北石組溝は、幅 120 cm、深さ約 15 cmを測ります。側石は 50~60 cm大の比較的大きい石を用いています。西側石は良好に残っていますが、東側の側石はすべて抜き取られて残っていませんでした。東西石組溝は、幅 90 cm、深さ約 10 cmを測ります。底石は東側が人頭大の石、西側は拳大の石を用いるなど石の大小を分けて敷き詰めています。

石列は、東西石組溝に平行するもので、この溝から北に 1.4mの位置にあります。砂利敷は、南北石組溝の西側に広がって確認しました。全面に砂利敷で覆われていたと考えられます。

土管掘形は、南北石組溝に斜行して検出しました。幅約 160 cmを測り、埋土には礫を多く含んでいます。今回、土管自体は確認していませんが、当調査区の北側でおこなわれた 21 年度調査区で延長部分を確認しています。この土管は西門門前の調査でも確認されており、当調査区から北側に約 180mにわたって延長していることがわかりました。

このほか、南北につらぬく幅 3 mの素掘溝を確認しました。石組溝と石列を壊して流れていることから奈良時代以降と考えられます。

## 3. まとめ

今回の調査では、飛鳥寺西方地域で飛鳥時代後半代を中心とした遺構を確認することができました。また、南北石組溝が約 130m、土管が約 180m以上にわたって南北に延長することが明らかとなりました。今回の調査区でも建物跡は確認できませんでしたが、新たに東西方向の石組溝と石列を確認しました。これまでの調査をふまえると、調査地周辺は建物跡がなく、全面に砂利敷が施された空間が広がっていたと考えられます。今回の調査は、当遺跡が飛鳥寺西方に広がる槻樹の広場を解明する上で重要な資料となるでしょう。